

日本民族起源論

—鳥居龍藏と喜田貞吉の比較—

田畑久夫

一・問題の所在

第二次世界大戦以前においては、国家神道に基づく、現人神である天皇が君臨する歴史認識である皇国史観が、歴史認識の主流として認知されていた。そのため、初・中等教育における歴史教育では、かかる歴史認識の教育が実施されてきた。とくに十五年戦争期（一九三二—一九三五年）では、皇国史観がわが国の唯一の正統的な歴史認識として位置づけられた。そしてその他の歴史認識は、国体にそぐわない史観として、徹底的に弾圧・排除された。

しかるに、第二次世界大戦直後においては、連合国最高司令官総司令部（略称GHQ）の指示による民主化政策の一貫として、歴史認識^②に関しても多様な歴史認識の主唱が許された。その歴史認識の代表と目されるのは、客観的事実（史実）に基づかないものは歴史と看做することができないと考える立場である^③。このような立場は、第二次世界大戦以降現在においても、歴史研究および歴史教育では中心的な思考であり、傾向であるといえる。

以上論じた第二次世界大戦後の歴史認識について、本稿の主題との関連において最初に取り上げ、検討・分析しなければならぬのが、民族学（文化人類学）を専攻する岡正雄が展開した学説であ

る。その学説とは、大間知篤三、関敬吾らと共同編集した日本民俗学を体系的に論じた講座本に執筆した論攷「日本文化の基礎構造」（一九五八）で主唱したものである^④。この岡正雄論攷は、発表こそ第二次世界大戦直後ではない。しかし構想自体は、一九三三年に留学先オーストリアのウィーン大学に提出された学位請求論文（*Kulturschichten Alt-Japan*、「古日本の文化層」）SBdにその梗概が確認できる、日本民族文化形成の主内容を端的に縮めたものである^⑤（大林一九四四・二七二）。岡正雄の「日本文化の基礎構造」の特徴は、対象とする日本文化が皇国史観に代表される単一文化ではなく、相異なる民族集団による、雑種文化あるいは混合文化と称されることの多い文化であると看做す点である。具体的にいえば、極東の離島に位置する日本列島には、その列島を取り囲む周辺諸島地域から伝播した各種の文化が重層し、累積しあつて、日本固有の文化を形成したとする視点である。すなわち、かように重層し、累積しあう文化層が幾度となく時代を違えて伝播し、それが日本文化の基底となったと推察するのである（田畑二〇〇三・八一—九）。

岡正雄は、右記の「日本文化の基礎構造」の冒頭箇所において、「日本文化は、いわゆる固有文化を基盤として…（中略）…一つの混合、

累積的構造の文化であること、またさらに、固有文化といわれるが、すでにいくつかの異質・異系の種族的文化から成立した多元的文化構造としてとらえられるであろう」(岡一九七九・一八)と鋭く指摘する。岡正雄によれば、このような研究視角は、既に右述したことから容易に類推可能である。つまり、日本民族文化形成論の主要な論点とも称すべき、かような起源・系統、および発展の問題に関しては、従来相異なる立場からの学説が提出されている。その第一は、日本民族が石器時代なかならず新石器時代に属する、縄文式文化の創初以来、既に日本民族として日本列島に定着し、すべての石器時代文化を創造したとする進化主義的な立場である。この立場は皇国史観に通じる学説といえよう。その第二は、日本民族が、石器時代以降、幾つかの異文化を所有する民族と称される集団が日本列島に渡来し、これらの集団の重層・混合によって形成されたと看做す学説である(岡一九七九・三)。岡正雄は勿論後者の立場を堅持するが、この学説は、内容自体が第一の立場を明白に否定することになる。それ故、日本において公表されたのは、自由に発表ができることになった第二次世界大戦後であった。しかも、論攷という形式ではなく、文化人類学者石田英一郎の司会による座談会の席上でその概要が示された。

それでは、日本列島に伝来した、異文化を所有する集団から、どのようにして、日本固有の民族文化が形成されたのであろうか。この点に関して、岡正雄は、「まず民俗といわれる生活文化、古典に

伝えられた伝承や記録を分析し、いくつかの生活文化の複合をさがし求める」(岡一九七九・一八)ことよって、いくつかの類型を定立し、あるいは再構成する。これが岡正雄が主唱する文化層である。一方、比較民族学の知識や手法を用いて、日本文化を分析し、現在において一見相互関連が認められないような文化要素を複合すること、類型を発見し、再度起源の連関に再構成する試みを行なう作業を実施する。といっても、日本民族文化を形成したと考えられる種族文化複合は、周辺諸集団との接触が混合によって、それらの種族文化としての文化的統一性の解体が進む。つまり、あるものは文化要素が衰退・消滅したり、変貌・遊離・浮動する。またさらに、あるものは異質・異系の文化要素と結着・癒合して新たな文化形態を發展させる。それ故、種族文化複合は、質・量共に本来の姿を消失してしまっている。

そのため、種族文化にとつて重要な要素と看做せる文化要素が少しでも残っておれば、かかる文化要素をかつての種族文化の存在を語るものとして重要視したい(岡一九七九・一九)。このような立場から、日本の種族文化すなわち民族文化は、第一表に見られるように、出自、生業形態、起源(発祥地)、種族、社会組織など主要な要素がそれぞれ異なる集団が、五度に渡り年代や方向を違えて、日本列島に伝播してきたと主張するのである。岡正雄は、これら渡来してきた集団を文化層と名付ける。かような文化層を形成する集団が、日本列島に定着することが長期間に及ぶと、互いに接触・交

第1表 岡 正雄による日本文化の基礎構造

項目 \ 段階	①	②	③	④	⑤
出自など	母系的	母系的	父系的	男性的	父系的
生業形態	芋栽培・狩猟	陸稲栽培・狩猟	畑作・狩猟・飼畜	水稲栽培・漁撈	騎馬遊牧
起源地	メラネシア	中国・東アジアの山地・丘陵	中国東北、朝鮮半島	中国江南	中央アジア
種族	メラネシア人	オーストロアジア系	ツングース系	オーストロアジア系	アルタイ系
社会組織(集団)	秘密結社	家族的・村落共同体のニヤマシズム	「ハラ」氏族	年齢階梯制	「ウジ」氏族
日本への伝来(時代)	縄文時代中期	縄文時代末期	弥生時代初期	弥生時代(紀元前4～5世紀)	4世紀前半
伝播コース	南方	南方	北方	南方	北方

(出所) 岡正雄 (1974) : 『異人その他 日本=文化の源流と日本国家の形成』言談社 18 - 36 より作成。

流することになる。いわゆる雑種文化と称される。混合文化が形成されるのである。

以上やや詳細に、岡正雄にみられる日本民族文化の形成を検討した。このような特色を有する岡正雄の日本民族文化形成論は、現在において論じられている、日本民族および文化に関する起源すなわちルーツについての基底となる、一般的認識である。つまり、岡正雄の学説をその端緒として、江上波夫が唱える「騎馬民族国家」論^⑤(江上 一九六七)、中尾佐助・佐々木高明による「照葉樹林文化」論^⑥(上山 編 一九六九、佐々木 一九八二、田畑 二〇〇三など)に代表される民族国家論や文化論に、その後展開されていったといっても過言ではないのである。

右述したように、岡正雄の主唱する日本民族文化形成論は、第二次世界大戦中に留學先のウーイン大学において作成された。学位請求論文に結実している。この岡正雄の学説は、完全に孤立した状態、つまり他の文献や研究者の影響を受けないで完成されたものではなかった、と推察される。ほぼ同様の構想を既に発表していた研究者が存在するのである。鳥居龍藏がその人物である。以下では、かかる鳥居龍藏などの構想に触れつつ、ほぼ同時期に研究生活を送った、歴史学を専攻する喜田貞吉の提唱と比較する作業を通して、日本民族起源論について、分析・検討を行なう。なお、鳥居龍藏および喜田貞吉の両名は、同郷の徳島県出身である。鳥居龍藏および喜田貞吉がそれぞれ展開する日本民族起源論は、完全に一致しないが、相

当相通ずる主張であり、右述の「騎馬民族国家」論、および「照葉樹林文化」論などに代表される、その後の日本民族文化形成に、少なからず影響を及ぼしたからであると断言しうる。この点についても、分析・検討を加える。

本稿では、以上において論じた研究視点から、日本民族文化の形成、とりわけ日本民族の起源の一端を論証しようとするものである。すなわち、その先駆者として、鳥居龍藏と喜田貞吉の唱える日本民族起源論に焦点を当て、論を展開していく。

二、日本民族起源論前史

日本民族起源論とは、日本民族の起源すなわち日本民族の祖先が誰であるかという論議である。我々は、一般に日本人と称することの多い日本民族として、アメリカ人、中国人をはじめとする他の民族集団と同様に、自らの祖先に関して非常に関心のあるテーマである。それ故、古くから日本民族についての議論つまり論争が続いてきた。長らく続いたのは、その結着が付いていないからである。この論争においては共通した一般的な認識がみられる。その認識とは、日本列島に最初に登場した集団は、石器の出土が確認できる時代であった。

古代においては、石器時代のメルクマークと目されている石器は、天井から地上に降下してきたとする「石器天降」説が有力視されていた(水野一九七〇:二二五)。

その後時代が下ると、石礫を筆頭とする石器は、人間が製作したとする「石器人工」説が登場する。その代表として、江戸時代中期の儒学者であり、政治家であった新井白石が挙げられる。新井白石は、東北地方を中心に、大雨後地表に露出する石礫などの石器が、これまで考えられてきたように天界に座す神々の争いに使用された武器の一部が偶然に地上に落下したのではなく、『孔子家語』など中国の古書に散見される、中国東北地方に居住していたとされる、肅慎人が佐渡が島や蝦夷地に侵入し、残したものではないか、と推定した⁽¹⁴⁾。つまり、新井白石は、日本石器時代の住民は、日本民族ではなく、非日本民族であるという見解を提出したのである。かかる非日本民族論が、日本民族起源論の大きな流れの主流となっていく。右述した新井白石に続き、石器時代の住民非日本民族論をより具体的に展開したのが von Stebald, P. E. (大シーボルト)であった⁽¹⁵⁾。von Stebald, P. E. は、註(15)で紹介した Kämpfer, E. 同様、オランダ商館の医師として長崎にやってきた。von Stebald, P. E. は、古代において、石器・青銅器・鉄器の三時代が発見段階として存在することを既に知っていた。そこで、かかる前提に立って、各地方から出土する石礫、曲玉など石器時代を中心とした遺物に関して検討を進めた。その結果、石器時代には、日本列島にはアイヌが分布・居住していた。また曲玉は、石器時代以降にアイヌに代って、日本列島に居住した集団つまり日本人によって製作されたものであると判断した(水野一九七〇:二二七)。かかる石器時代の住民(縄文人)

であるアイヌが、日本民族の祖先であるという新説は、次男の von Siebold, P. E. (小シーボルト) によって発展的に継承された。

明治時代(一八一八—一九二五年)に入ると、多数の外国人が来日した。日本が開国したことが大きな理由であった。このように、来日した外国人の中には、外交官や東京帝国大学の教授など明治新政府が招聘したお雇い外国人などと称された知識人や文化人なども含まれていた。後者のお雇い外国人の一人が Morse, E. S.¹⁷⁾ である。Morse, E. S. が日本民族起源論に強い関心を有するようになった動機は、横浜・新橋間を走る蒸気機関車の車窓から、後に大森貝塚と名付けられることになる貝塚を発見したとされている。しかしながら、工藤雅樹も論じている如く、大森貝塚についての調査報告書(Morse, 一八七九、近藤・佐原編訳一九八三・六一—一二二)の中には、日本民族の記載がないといってもよい程、言及が少ない(工藤一九七九)。むしろ、日本民族起源論に言及したのは、大森貝塚発掘直後の明治十年(一八七七)に行なったアジア協会での講演(Morse, 一八九七)においてであった。すなわち、その講演に基づく論攷(Morse, 一八九七)の中であつた。その論攷の中で Morse, E. は、「(一)の(神武天皇のこと—筆者註) 侵軍は勇敢な抵抗に遭遇したので、その故郷までの後退を余儀なくされたという。神武天皇とその輩下たちを追い出したのは、北海道の多毛の人たち(アイヌのこと—筆者註)、すなわち現在、北辺の島々に住む人びとの祖先だと信じている(池田訳一九七三・五五)と推定した。具体的にい

えば、神武天皇とその輩下たち、すなわち日本民族の祖先と想定される集団よりも、アイヌが早く日本列島に分布・居住していたとする、アイヌ先住民族説を主張したのである。

調査報告書にみられる、大森貝塚から出土した石器や土器を使用した集団は、どのような民族集団であるかについて、当時研究者間では大問題となつた。見解がアイヌであるという説と、アイヌではない非アイヌ説に二分されたのである。Morse, E. は、大森貝塚を残した集団の系統に関しては、上述したように、同調査報告書の中には、詳細な記載がみられなかつた。前に述べた講演内容を纏めた論攷から明らかな如く、大森貝塚の遺物から、石器時代の住民を、アイヌ以前に日本列島に分布・居住していたと推定できる別系統の集団であろうと推察した。

かように推察するに到つたのは以下の三点からであつた。第一は、大森貝塚の住民は出土した人骨から、食人の習慣がみられる。しかしアイヌには、このような習慣がみられないこと。第二は、大森貝塚では石器と共に土器も出土する。しかしアイヌは、土器を製作する技術をもたなかつたこと。第三は、古代人が一般に曲玉を好むという習性を有しているとされる。しかし、貝塚からは曲玉が発見されなかつたことである(工藤一九七九・五四)。Morse, E. は、日本列島の住民の祖先が、アイヌ以前に同列島に居住していたと推定される集団であるとする、プレ・アイヌ説を主唱していたのであるが、その説が形成されるまでには、このような経緯が存在したのであつ

た。

von Siebold, H. P. (小シーボルト)が、オーストラリア政府の役人として来日したのは、Morse, E. が来日した数年前の明治二年(一八六九)であった。それ故、von Siebold, H. P. および Morse, E. の両名は、ほぼ同時代に日本に滞在したことになる。von Siebold は公務以外に、父親(大シーボルト)同様に、考古学に関して多くの興味・関心を有した。そのため、東海、関東および北海道の各地にある遺跡を巡り回り、発掘などにも従事した。そのことから、考古学に関して多大の知識をもっていた。そうであるからこそ、Morse, E. が大森貝塚を発見・発掘して大きな成果を挙げたことは大ショックであった(寺田一九八一:三二)。

von Siebold, H. P. は、自らが行なった遺跡の見聞や発掘調査などを踏まえて、次のような見解をもつようになった。その見解の第一は、遺跡の多くに青銅器が伴出すると共に、朝鮮、シナ、マライなど海外に産出する石を材料として製作された曲玉、管玉が出土すること。第二は、骨角器も伴出し、日本産の石で製作した打製および磨製の石器を伴うことである。その内、前者の第一の方が新しく、神武天皇東征によってできた文化であると推定できる。一方、後者の第二は古くてアイヌのものであると考えた(寺田一九八一:三二)。以上の二点から、アイヌが日本列島の最初の住民であるとする父親のアイヌ説を補強すること、Morse, E. が唱える非アイヌ説に対して鋭く反論を加えた。

ほぼ同時期に来日した、お雇い外国人 Milne, J. も日本民族起源論に参加する⁽¹⁸⁾。Milne, J. は、専門とする鉱山学や地震学の基礎的資料を収集するなどの目的で、北海道に出かけた。しかし Milne, J. の足跡は北海道内に止まらず、択捉島、占守島など千島列島にまで及んだ(工藤一九七九:六五—六六)。同調査は、竪内式住居や貝塚の発掘を自ら実施するなど本格的なものであった。その発掘調査などの結果から、「かつての北海道にみられる竪穴式住居の現代の後継者が、千島やカムチャッカ・樺太にも見出される」(工藤一九七九:六六)と推論するに達した。

とくに、発掘した竪穴住居の住民を、アイヌは、コロ、ボク、グルと呼んでいたことを知った。コロボクグルとは、穴に住む人の意味である。また Batchelor, J. によると、アイヌの伝承では、コロボ(ボ)ツクルは、背が低い集団で、地面に穴を掘り、その上に円錐形の小屋(竪穴式住居)を建てる習慣をもつ。また土器製作も行なっていた(工藤一九七九:六六)。Milne は、かような Batchelor, J. の説を紹介した。さらに、自らが調査を実施した択捉島などの発掘事例などから、北海道における竪穴式住居および石器や土器は、北海道アイヌが伝承してきたコロボ(ボ)ツクルが千島アイヌの祖先に当たる集団であると主張した(Milne, J. 一八八二、吉岡・長谷部一九九三:二二三—二四七)。かかる Milne, J. の説は、単純に日本民族の祖先つまり石器時代の住民をコロボ(ボ)ツクルであると提唱したのではなかった。Milne, J. は、Siebold, H. P. の日本石器時代

の住民アイヌ説を支持する。その一方において、石器時代には、アイヌの伝承でコロボ（ポ）ツクルと呼ばれていた集団か、右述したように、本州に主として分布・居住していたアイヌと併存した形で、千島列島を中心に居住していたとした（吉岡・長谷部訳一九九三・二二四―二二七）。かように、Mine, J.の見解は、工藤雅樹によれば、後に坪井正五郎の唱える日本民族コロボ（ポ）ツクル説の先駆となる説とでもいえるし、千島列島の住民の祖先が、北海道にみられる竪穴式住居を残したと推定する点は、鳥居龍藏のアイヌ説のさきがけでもあったと指摘する（工藤一九七九・六七）。

三．鳥居龍藏の「固有日本人」論

前項では、鳥居龍藏および喜田貞吉が発場するまでの、日本民族起源論、すなわち日本人の祖先論争について、検討を重ねてきた。具体的には、その流れつまり研究動向の中心となった、新井白石、Sebold 親子（大シーボルト、小シーボルト）、Morse, E. S. の主張に焦点を当て、それぞれの立場を検討してきた。このような流れを受けて、鳥居龍藏が加わることになる。鳥居龍藏は、最初から日本民族の起源に関して、研究を行っていたのではなかった。恩師である、東京帝国大学理科大学人類学教室教授坪井正五郎の依頼を受け、千島列島最北端に位置する占守島へ考古学的調査に従事したことが、本格的にかかる日本民族起源に参加することになった。

以上論じたように、鳥居龍藏の日本民族起源論の端緒は、他の内

外の研究者のほとんどが個人的に日本民族論に興味・関心を有したのとは異なっている。すなわち、鳥居龍藏の民族起源に対する関心は、自らの意志ではなく、恩師からの依頼が発点であった。しかも、鳥居龍藏が調査を実施したのは、Mine, J.も上陸して考古学的調査を行なったことのある占守島であった。以下では、鳥居龍藏との関連において、坪井正五郎の主張から論を展開していくことにする。

日本民族起源論は、既に論じた如く、日本列島における最初の住民は誰であるかという問題に集約される。かかる問題に関して、本格的、かつ科学的に議論がなされるようになったのは、明治維新後であった。明治維新により日本が開国し、欧米の進んだ科学的思考が導入されたからであった。このような社会的背景の下で、日本民族起源論に最初に取り組んだ日本人研究者が坪井正五郎であった。

右述した意味での日本人研究者を主体とした日本民族起源は、明治十年代末から明治二十年代頃（一八八五―一八九五年）にかけて急激な進展がみられた（工藤一九七九・八〇）。かかる論争の一翼を担ったのが坪井正五郎⁽²⁾である。

坪井正五郎は、幼少の頃から博物学的興味を有しており、この博物学的興味から人類学や考古学に対する学問的な関心をもつようになった。東京帝国大学理科大学生物学科在学中に、同じく学生であった白井光太郎と共に、明治十七年（一八八四）に人類学会を創設した。この人類学会の例会において、当時北海道委託生として東京帝国大学理科大学に学んでいた、動物学を専攻する渡瀬莊三郎が行

第2表 「固有日本人」論に關係する主要文献（抄）

文献番号	発表年月（西暦）	論文名など	掲載雑誌など
1	明治 28 年 1 月（1895）	アイヌの木偶と云へる物	東京人類学雑誌 104
2	明治 34 年 7 - 8 月（1901）	北千島に存在する石器時代は遺跡遺物は柳も何種族の残せしもの歟	地学雑誌 152
3	明治 36 年 7 月（1903）	千島アイヌ	吉川弘文館
4	明治 38 年 2 - 4 月（1905）	小金井博士の新著『日本石器時代の住民』を読む	史学界 7 ~ 3 ~ 4
5	大正 2 年 7 月（1913）	銅鐸土考	歴史地理 22 - 1
6	大正 5 年 11 月（1916）	古代の日本民族移住発展の経路	歴史地理 28 - 3
7	大正 6 年 9 月（1917）	閑却された大和国	人類学雑誌 32 - 9
8	大正 9 年 2 月（1920a）	日鮮人民は「同源」なり	同源 1
9	大正 9 年 2 月（1920b）	有史以前の日韓関係	同源 3
10	大正 12 年 4 月（1923a）	我が国の銅鐸は何民族が残した物か	人類学雑誌 38 - 4
11	大正 12 年 9 月（1923b）	有史以前に於ける朝鮮と其の周囲との関係	朝鮮 101
12	大正 14 年 5 月（1925）	有史以前の日本 改訂版	磯部甲陽堂
13	大正 15 年 5 月（1926）	朝鮮の有史以前に於ける南鮮と北鮮	東亜之光 19 - 5

（出所）鳥居龍藏（1977）：「著述総目録・年譜」 鳥居龍藏（1977）：『鳥居龍藏全集 別巻』朝日新聞社 179 - 222 より作成。

なつた口頭報告（渡瀬一八八六）の中で述べた、堅穴に居住するのがアイヌの伝承に登場するコロボ（ポ）ツクルに違わないとする、コロボ（ポ）ツクル説に、坪井正五郎は逸早く理解を示した。かかる渡瀬三郎の新説が、コロボ（ポ）ツクル説を広めることになつた（工藤一九七九・三）。

坪井正五郎は、右述した渡瀬三郎が唱えるコロボ（ポ）ツクル説を継承し、その立場を強力に主張したのであつた。坪井正五郎が主張するコロボ（ポ）ツクル説は、現役の東京帝国大学教授という肩書きも手伝つて、多くの人びとの支持を得た。さらに坪井正五郎は、持説であるコロボ（ポ）ツクル説の正統性を確認するために、当時坪井正五郎の研究室の標本整理係をしていた鳥居龍藏に対して、千島列島最先（北）端に位置する占守島に出張してくれないか、と話を切り出した。⁽²³⁾ 鳥居龍藏は大変恩義のある坪井正五郎のたつての依頼なので、占守島調査に出かけた。⁽²⁴⁾ その結果は、坪井正五郎の想定に反して、占守島に残存している堅穴式住居はコロボ（ポ）ツクルのものではなく、北千島アイヌと称されるアイヌの住居であつた。理由として、第一は、住居跡の形式が北千島アイヌのものと同形であること。第二は、出土した骨製円形の帯留は現在でもアイヌが用いている同じ形式のものであること。第三は、調査に同行したアイヌの助手から、蝦夷アイヌなど他のアイヌにはみられないが、占守島など北千島アイヌは数年前まで土器を製作し、使用していたこと。以上の三点が挙げられる（鳥居一九五三、同一九七六C）。

二〇九など)。また居住していた竪穴式住居は、アイヌが寒さを防
止する目的で、暖を取りやすいように住居を小規模にしていること
も判明した。

以上から、鳥居龍藏の占守島調査は、坪井正五郎が主張するコロ
ボ(ポ)ツクル説の補強となるのではなく、むしろ対立するアイヌ
説に有利な資料を提供することになった。この点に関して、アイヌ
説の先頭に立つ小金井良精は、その講演の中で、鳥居龍藏が行なつ
た占守島調査を「即ちアイ」(アイヌのこと―筆者註)と云ふもの
は曾て石器時代の人民であつて土器を捨て、又竪穴に住つて居つた。
さうして石器時代の遺跡を残したものである」(小金井一九〇三・
二〇二)と述べ、自説に有利であることを喜んだ。一方、これに対
して、坪井正五郎は、鳥居龍藏が指摘した土器(内耳土器)が出土
していないからといって、それが北千島アイヌのものとは断言でき
ないと論じ、強く反論した(坪井一九〇三・三三)。

このように、鳥居龍藏の占守島調査に関して、坪井正五郎、小金
井良精は共に激しく議論を戦わせることになった。このことは、鳥
居龍藏が大いに困惑するところとなった。鳥居龍藏は、若い頃より
坪井正五郎に師事し、長年多大の恩恵を受けていた。しかるに一方、
小金井良精にも講義を聴講させてもらうなど、種々の学恩を受けて
いた(鳥居一九五三、鳥居一九七六C・二〇四)。そこで、鳥居龍
藏はコロボ(ポ)ツクル説、アイヌ説の両説に対して、等しく距離
を置いていることを力説した(田畑二〇〇七・三七七)。

とはいうものの、鳥居龍藏は小金井良精の著書(小金井
一九〇五)の書評において、「石器時代人民は、博士は全く同一
人種⑳よりなれりといわれたり」(鳥居一九〇五、同一九七六C・
四九一)と論じた。すなわち、鳥居龍藏が自らの見解に対して等距
離を置くとして態度を保留したとはいえ、小金井良精の説に同意し
たという事実は、鳥居龍藏がアイヌ説に立脚していることが明確に
なったといわざるを得ない。かくして、鳥居龍藏はアイヌ⇨コロボ
(ポ)ツクル論争に参加することになった。㉑

しかし、既に論じた鳥居龍藏の立場。つまりアイヌ説およびコロ
ボ(ポ)ツクル説の両説に対して等距離を置く態度という、いわば
中途半端とでも称すべき学問的状况は長く続かなかつた。このよう
な経緯を経て、鳥居龍藏は日本民族の起源に関する新説を発表し、
展開することになる。

鳥居龍藏の日本民族の起源に関する新説には、前提とされる事項
が二つ存在する。その前提の第一は、恩師坪井正五郎が強力に押し、
日本民族の祖先コロボ(ポ)ツクル説を完全に否定したことである。
前提の第二は、「最古有史以前の当時に於て日本は勿論無人島であつ
たに相違ない」(鳥居一九一一、同一九七五・五〇四)と論じてい
るように、日本民族すなわち日本人は、日本列島に最初に來住した
集団であると推定した。以下では、これら二つの前提に立つて論を
進めていくことにする。

鳥居龍藏は、無人島であつた日本列島の最初の來住者集団であつ

たと推定する、アイヌが日本各地に分布・居住したいたことは、石器時代（有史以前）の遺跡およびそこから出土した遺物などから確認できる。そして、その子孫が現在の北地―北海道、樺太、千島列島―の僻隅に残存しているのである。また、石器時代のアイヌは、どこから日本列島に渡来してきたかについては、確乎たる定説がないとしつつも、北方の大陸と表現する極東大陸にみられる石器時代の遺跡および遺物の出土状況をみれば、日本列島のそれと異なっていることは明らかである。それ故、アイヌが朝鮮半島を直接經由して渡来したものではないと推察できる（鳥居一九一、同一九七五・五〇四）。

その後、このアイヌとは別に、北方から「朝鮮半島を経てあるいは沿海州辺から日本海を渡って日本海に来た」（鳥居一九二五b、同一九七五・三八〇）集団が定着した。それ故、石器時代の或る時期アイヌと非アイヌの両集団が日本列島において、併存していたと看做したのである。鳥居龍藏は、かかる後者の非アイヌ集団を「固有日本人」と名付けた。「固有日本人」が北方から渡来してきた証拠としては、渡来前に居住していた地域―朝鮮、満州、東蒙古、沿海州―の石器時代とわが国の石器時代の両時代から出土する遺物が一致することを挙げてる（鳥居一九二五b、同一九七五・三八七）。かかる「固有日本人」と呼んだ集団が、先住していたアイヌを北へ北へと追いやったのであった。

なお、右述した北方から来住した集団のみが「固有日本人」では

なかつたか。鳥居龍藏によれば、この「固有日本人」を中核とし、その他の集団も加わっていた。その加わっていた集団とは、鳥居龍藏がいう、インドネシア^③とインドシナ民族^④である。これら両民族集団の類似点は、共に南方から来住したとされる南方系の集団であるといえる。すなわち、「固有日本人」は、これらインドネシアとインドシナ民族が接触・交流する過程を通して、混血した。そして、そのことから日本民族が形成されたことになる。しかし、この点に関して、あくまでその中核、つまり日本民族形成の本体は「固有日本人」であると主張する^⑤。

このように形成された「固有日本人」を中核とした集団は、当然単純な民族集団ではなく、「以上の複雑せる数種族が島帝国を集成して居るのである」（鳥居一九二五b、同一九七五・三九〇）と結論づける。さらに、このような特徴を有する日本民族の中で「ただ独りこの間帝室のみ連続して同一系統を続けて来て居らるる」（鳥居一九二五b、同一九七五・三九〇）と論じる。すなわち、種々の種族集団の集成によって形成された日本民族であるが、帝室つまり天皇一族は、他の種族集団とは異なり、同一系統を継承し、現在に至っていると主張する。この点こそ、鳥居龍藏が種々の集団の集成とみる「固有日本人」説を主唱しても、皇国史観を思想的背景・基底としている国家権力から抹殺されなかつた理由の一つと考えられる。

以上のような特色を有する鳥居龍藏が強く主唱する「固有日本人」

論は、北方から伝来した集団である「固有日本人」を中核としつつ、南方から来住した集団とも接触・交流することで取り込み、形成された新たな日本民族論である。かかる鳥居龍藏の新説は、本稿でも既に論じた、岡正雄の種族文化複合の先駆となった学説といえよう。

四、喜田貞吉の日鮮同祖論

前項では、鳥居龍藏が主唱する、「固有日本人」論を検討・分析することで、日本民族起源論の一端を説明する手がかりを探る作業を行なった。この作業を通して、日本民族起源論の主体とでも称すべき、日本民族の性格を知り、それを説明することが必要であることが判明した。日本民族の起源に関する代表的な論争であると推察するアイヌ・コロボ（ポ）ツクル論争は、正しく日本民族の主体に係わる論争、つまり日本列島に最初に分布・居住したのは誰であるか、という問題に帰着する。換言すれば、アイヌ説およびコロボ（ポ）ツクルの両説にみられるように、日本民族の起源すなわちルーツを探求する作業に、お雇い外国人なども巻き込んで議論が戦わされてきたのであった。鳥居龍藏の「固有日本人」論は、それまで議論されてきた学問的な蓄積を踏まえて、展開された新説であった。喜田貞吉が主張する日鮮同祖論は、鳥居龍藏の「固有日本人」論と並んで、日本民族の起源を説明するために提出された推論であるといえる。⁽³⁶⁾喜田貞吉は、専門とする歴史学（日本史学）を中心に、歴史地理学⁽³⁷⁾や社会学など隣接の学問分野の研究手法や分析手段を積

極的に導入した。そして、それらの手法や手段を駆使することにより、独創的とでも称すべき学際的研究（interdisciplinary studies）に従事していたのであろう。このように、喜田貞吉は、学際的研究を続け、非常に多くの論攷を世に問うてきた。⁽³⁸⁾以上述べたように、非常に多くの論攷を発表したのであるが、研究書（専門書）として結実した単行本は稀かに『帝都』（日本学術普及会、一九一五年）。『法隆寺論攷』（立命館出版部一九四四年）、『藤原京』（地人書房一九四二年）など数冊に過ぎない。その理由として、「その当時において、これと信ずるだけのものは、出来次第便利な活字の授けを借りて学界に発表し、これによって一方には識者の注意を受けてさらに研究を重ねる。一方にはさらなる新資料を得るに従って訂正増補を加える。かくてこそ学問は進歩すべきもので、それには雑誌上の発表が一番良い」からであると断言する。

以上のような観点から日鮮同祖論が展開された。かかる日鮮同祖論は、自らの論攷の論題（喜田一九二〇、同一九七九・三五七―四一九など）のように、日鮮両民族同源論が正しい名称である。喜田貞吉は、日鮮同祖論のみを研究対象としたものではなかった。日鮮同祖論は自らが強く関心を有している民族史研究の一部として、主唱する日本民族論研究の集大成として結実したものである。つまり、喜田貞吉の民族史研究は、原史時代など古代の研究が主たるものであり、専ら「古代の住民」の歴史的考察が中心であった（上田一九七八・一一一）。

第3表 日鮮同祖論に関する文献(抄)

文献番号	発表年月(西暦)	論文名など	掲載雑誌など
1	明治40年1月(1907a)	中田君のアイヌ語神名考を読む	史学雑誌18-2
2	明治40年1月(1907b)	蝦夷とコロボックルの異同を論ず	歴史地理9-3
3	明治43年7-8月(1910)	土蜘蛛種族に就て(小林君の駁論に答う)	歴史地理10-12
4	大正5年3月(1916a)	日本太古の民族に就て	史学雑誌27-3
5	大正5年7月(1916b)	倭人考緒論	歴史地理28-1
6	大正6年8月(1917)	秦人考緒論(秦人考の一)	歴史地理30-2
7	大正7年12月(1918)	倭人とは何ぞや	筑柴史談19-1
8	大正8年1月(1919a)	日本民族とは何ぞや(日本民族の概表を論ず)	民族と歴史1-1
9	大正8年6月(1919b)	朝鮮民族とは何ぞや(日鮮両民族の関係を論ず)	民族と歴史1-6
10	大正9年12月(1920)	日鮮民族同源論梗概	同源3
11	大正10年2・3・4月(1921b)	日本民族の成立(上・中・下)	民族と歴史5-2・3・4
12	大正10年7月(1921)	日鮮両民族同源論	民族と歴史6-1
13	昭和4年7月(1930)	日本民族史概説	日本風俗史講座5
14	昭和13年3月(1938)	日本民族の構成	日本文化史体系1

(出所) 喜田貞吉(1982):「著作目録」 喜田貞吉(1982):「喜田貞吉著作集第14巻 六十年の回顧・日誌」平凡社 529-614より作成。

このような喜田貞吉の民族史研究の流れ、研究動向に沿う形で考察されたのが、日鮮同祖論であった。日鮮同祖論は日本民族起源論と大変深い関係をもつ。それ故、喜田貞吉の民俗認識、すなわち民俗を如何にとらえるかについて検討しておく。喜田貞吉は、日本民族をまず「我が島国に住して、同一の国語を話し、同一の風俗をなし、みずから同一民族なることを意識して、ともに一系の天皇を奉戴するいっさいの民衆を総称する」(喜田一九一九a、上田一九七八…二二一)と規定する。そのうえで、「実に天津神の後裔たる天孫族と、これに同化融合した国津神の後裔とが相倚り相結んで成立した」(喜田一九一九a、上田一九七八…二〇七 傍線筆者)と論じる。

以上論じたように、喜田貞吉は、日本民族＝天孫民族であるとする単一民族とは看做さず、上記引用文中の傍線にみられるように、天津神の後裔と、天津神に融和・同化した国津神の後裔との二系統からなる複合民族(複族民俗)であると考えている。つまり、アイヌ人、および朝鮮、台湾、樺太などに居住する土着の集団は、日本民族から除外されることになる(喜田一九一九a、上田一九七八…二二一)。ただし、毛人、衆夷など先住土着の諸民族集団、並びに秦、漢、百済など海外帰化の諸民族集団は、天津神に融和・同化した国津神の後裔なので、日本民族を形成する集団であるとする。これらの日本民族を形成する集団は、「非常に長い年代の間に種々異なった民族の上に、いわゆる天孫種族の小枝が接木されて、今や十分に同化融和して…(中略)…ことごとく天孫種族になっていて、

肉体の上にはいわゆる台木の容貌がいくらかずつ現われる」(喜田一九一六、同一九七九・七)というように、上田正昭が指摘する日本民族接木論(上田一九七八・五一―五三)の立場を貫いている。

しかしながら、喜田貞吉が主張する日本民族論に関しては、そのキーワードと推定される天孫民族が典型的なのであるが、同語概念規定を厳格に行なわないで使用している点、また古文献を取り上げた場合、ペーパークリティーク(文献批判)の論証不足、さらには出土した遺物などの解釈に関しても異論を挟む余地が多々存在することなど、学問的な曖昧点もみられる(上田一九七八・五一)。

以上のような特徴を有する日鮮同祖論を主唱する喜田貞吉の主張に沿って検討を加えていくことにする。検討に際しては、喜田貞吉の日鮮同祖論の代表的な論攷(喜田一九二二、同三二七―四一五)を中心に行なう。⁽⁴⁾

最初に著作つまり右記論攷が発表された年代から、論を進める。その年代とは、韓国併合(一九〇四年)後、十一年を経過した大正十年(一九二二)である。韓国と日本は融和の実をあげつつある。しかしなお、韓国併合から十年以上を経過しているにもかかわらず、両国は互いに意志の疎通を欠き、相互の間に紛擾を起している。喜田貞吉によれば、その理由は、韓国、日本領国の住民が共に帰属するまで民俗が異なっている。それ故、他人同士が寄り合ったものであるという誤想に基づいているからであると、指摘する。この点に

あることを十分に理解すれば、かような誤想も消滅するのである。誤想が個人間あるいは団体間の問題であるならば、この正邪の道理が明らかになった以上、比較的容易に相互の誤滅できる。しかしながら、誤想がなくならないのは、「民俗を異にするとの観念を交えた意志の疎通は、その融和がきわめて困難になることをつねにする」という。喜田貞吉は、このような状況が続いているのが現状であるという認識を有していた。

そこで、専門とする歴史上の観点から日鮮両国本来の関係を論述して、日鮮両民族もそのような区別が存在しなかったという事実を理解してもらおうと試みる。そしてそのことが、日韓の融和に貢献することに役立てばとの思いで作成したのが、日鮮両民族同源論つまり日鮮同祖論に関する論攷である。それ故、同論攷は学術的内容であるが、極めて政策的な側面が前面に出ていることが、特徴として挙げられるのである。

喜田貞吉の日鮮同祖論は、右述したように極めて政策的な意味内容を有する論攷であった。そのため、政策的な側面を有するが故に、喜田貞吉自らの立場が強く問われることになる。この点に関しては、「余輩は多年の研究の結果、日鮮両民族の同源なることを確信する」と、明確に自らの立場を表明する。それでは、自らの立場と大いに関係がある、同源という用語を、どのような意味で使用しているのであろうか。同源は、極めて漠然たる内容をもつ用語である。すなわち、同源を単に起源と同じであるとする広狭に解釈すれば、地球

上に実在する全ての人類はことごとく、同一の祖先から分岐したものであることから同源となってしまう。しかし、人類は一ヶ所より出でて繁殖し、各地に分散して生存を継続していくうちに、生活の状態や固国の環境に適応しなかつたものが淘汰される。そして適者のみが生育するという適者生存の結果、各地において種々祖先と称される集団が形成されたのである。したがって、同源という用語には、広狭はなほ多くの階級があることを認める必要がある。その事例として、ヨーロッパ人やアフリカ人は我々の東洋人との相違が非常に著しい事実が挙げられる。そのような事実から、「日鮮両民族は比較的最も近いところに共同の祖先を有するもの、すなわち比較的最も狭い意味での同源である」と結論づける。

また、同源である民族の祖先は、決して単一から構成される集団ではなく、その構成は非常に複雑なものである。それ故、日本民族および朝鮮民族が、それぞれ如何に祖先を構成する集団が複雑であるかを、両民族の主要な構成要素を分析し、検討することで明らかにしようとする。

日本民族の場合、かように複雑な構成要素として、日本語、神話（日本神話）、考古学上の知見、諸蕃の渡来などが詳細に検討される。そしてこれらの複雑な構成要素を内包する集団が、天孫民族の渡来により融化され、日本民族が形成されたのであった。具体的には、「もとは無人島であったこの群島へ、前後数回に移住した多くの民族が天孫民族のもつて宗家と仰ぐ万世一系の天皇御統率のもとに、相倚

り相結んで渾然融合した一大民族をなし」と主張する。この一大民族こそが日本民族なのである。

朝鮮民族も日本民族と同様に、種々の複雑な構成要素を内包する複族民族である。これらの種々の集団は、朝鮮半島が位置する自然地理学的条件から、大陸内部に住む種々の集団が段々と押し出されて、この地に集合して形成された。朝鮮民族を構成することになる種々の民族集団としては、韓族^⑥、扶余族、漢族などが挙げられる。

このように太古において、日鮮同域という程、双方の民族の關係が密接であつた。その中でもとくに倭人は、対馬海峡を挟んで、左右すなわち朝鮮半島および日本列島に分布・居住し、区別されることがなかつた。右述したように、元来朝鮮の民族は、先住の韓人つまり倭人系の集団、満州方面から南下した扶余系の集団、さらにシナから来住した漢族などが主たる構成要素となり、互いに混血すること、今日の朝鮮民族を形成したのである。

同様に、日本民族も、扶余系の集団と近いと推定される天孫民族、隼人、倭人、出雲民族などと各々称された弥生式系統の集団、銅鐸を残したとされる秦人つまり秦韓の古漢族、およびその後帯方郡から渡来した新漢人と呼ばれた漢族などの各集団が互いに同化融合して形成されたとみる。それ故、日本および朝鮮の両民族は、本来取て区別のなかつた集団であつた。その後時代が下つて、有史時代においても、両民族は、移住、通婚、混血が続いたのであつた。

以上から、日本民族と朝鮮民族とは、本来の要素が同一であつた

ばかりではなく、その後も互いに混血することが多く、實際上同一民族と称してもよい集団なのである。しかるに、今日、日鮮両民族が度々紛擾を起すのは、日本民族の旧韓国国民に対する待遇が頗る良くないことも原因であるが、両民族が本来同源であることに思いが及ばないで、互いに異民族視している結果であると断じる。すなわち喜田貞吉は、「韓国併合は決して異民族を新たに結合せしめたのではなく、いったん離れていたものを本に復したものと説き、その正当性を強く主張したのであった。

五. 「固有日本人」論と日鮮同祖論の比較

日本民族論を検討するために、その代表的な学説とされる。鳥居龍藏が主唱する「固有日本人」論と喜田貞吉が主張する日鮮同祖論に焦点を合わせて、両論の基本的な性格などについて、論を展開してきた。その結果、両論は、それを提出した鳥居龍藏および喜田貞吉、両名の学問的な方法論や分析手段が確認でき、大変注目すべき論であることが判明した。以下では、両論の類似点と相違点を比較することで、それぞれの論の特色をより客観的に認識することに努めた。

(一) 類似点

「固有日本人」論および日鮮同祖論は、両論とも日本民族の起源、つまり日本人の祖先に関する学説であることは明白な事実である。しかしながら、鳥居龍藏および喜田貞吉の両名に共通しているのは、

上述した如く、日本人の祖先に関する学説であるが、日本人の祖先のとらえ方である。というのは、日本人の祖先に関しては、研究者を含めて一般の人びとも大きな関心がもたれるテーマである。そのため研究書の出版が多い。これら研究書などの書名は、例えば、工藤雅樹（工藤一九七九）にみられるように、『日本人論』としてゐる。このように、研究対象である日本列島に最初に分布・居住した集団は、人種なのか、民族なのかという問題から検討しなければならぬ。

日本列島に最初に居住した集団を人種という概念で認識し、日本人の祖先に関する研究を非常に丁寧にかつ詳細に検討した代表的な研究者は、日本考古学を専門とする工藤雅樹^①（工藤一九七九、同一九九八）である。工藤は、「人種論はある時期まで、考古学および人類学の主要な関心事であった。だから人種論の研究は、日本考古学の主たる柱のひとつにならざるを得ない」（工藤一九七九・三一—四）と人種論研究の重要性を力説する。しかし、このように、人種論研究の重要性を説くが、その研究を主体とでもいふべき人種、この場合日本人種についての明確な定義は勿論のこと、説明すらみられない。それでは、かかる人種の明確な定義ないし説明が、何故必要とされるのであろうか。既に論じたように、人種という概念を定義することは極めて難しい。それ故、この用語自体幻想に過ぎないという主張もみられ、それが多くの研究者の支持を受けているようである。

以上から明らかなように、人種を明確に定義することは困難である。しかし、本稿との関連に限定して言えば、日本人の祖先を人種という用語で把握することが可能なのである。つまり、人種は単一あるいは単独の人間集団を意味する。それ故、アイヌは、例えば蝦夷アイヌ、樺太アイヌなど地域名を冠した集団に分けることができるが、確実に単一集団であるから人種という概念で把握可能である。ところが、日本人の祖先という場合の祖先という概念は、単一の集団を意味する概念であろうか。日本人の祖先は、種々の性質の異なった集団が、日本列島において、種々の条件下で混血などした結果形成された集団であるといえないだろうか。

この点について水野祐は、既に指摘したように、文化複合体を共有する集団を人種と呼び、この人種に対して民族という名称を当てている（水野一九七〇…二〇五）。鳥居龍藏および喜田貞吉は、水野祐と同様に、日本人の祖先を、人種ではなく、民族と認識しているという共通点を有している。

以上から、日本民族起源論に関しては、アイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争までは、日本民族を人種論的に解釈したものであるといえる。つまり、アイヌ、コロボ（ポ）ツクルは、右述したアイヌのよりに地域的に分派（亜）集団の名称が異なっているが、それぞれ独立した単一の集団である。それを受けて展開した「固有日本人」論および日鮮同祖論は、これまで検討してきたことから容易に推察されるように、日本人の祖先は単一の集団ではなく、複数の集団よ

り形成された民族なのである。本稿で、「固有日本人」論および日鮮同祖論を日本民族起源論の典型的な事例として取り上げ、検討・分析したのは、このような研究視角で我々の祖先を把握するということにも大いに関連している。

以上のように、日本人の祖先は、日本人種ではなく、日本民族と称される集団がその起源と目されることになる。鳥居龍藏および喜田貞吉の両名の日本民族起源論は、正しくこのような意味での日本民族の起源についての主張であると推察する。なお両名の見解では、日本民族を形成する種々の集団のルーツは日本列島ではなく、日本列島を取り巻く周辺地域より来住した集団であるとする。これらの集団は時代を違えて日本列島に来住し、互いに接触・交流することによって混血して日本民族となったのである。しかも、かかる集団は、それぞれの本拠地がシベリア、満州、沿海州などユーラシア大陸東部に位置する、極東地域と称されることの多い北方地域からの来住であった。

さらに、「固有日本人」論および日鮮同祖論の史料として、『日本書紀』、『古事記』のいわゆる『紀記』に記載されている神話（日本神話）を使用している点である。現在では、かかる神話は、その内容が史実としての信憑性に欠けている。それ故、パーパクリティークなどを通して、信頼にたる史料を通して、歴史を復元することを目的としている歴史学（日本史学）からは、非常に問題があると思われる。とりわけ、鳥居龍藏および喜田貞吉とも、神話などにみられ

る天津神系、それに取って代られた天津神系に属する集団が、日本民族の祖先の中核となる集団であると想定し、論を展開している点は、議論される余地が大いにありと推察される。

(二) 相違点

鳥居龍藏の主唱する「固有日本人」論は、ユーラシア大陸東部に位置する極東などの北方地域から、朝鮮半島を経由して、日本列島に進展してきた集団が、日本民族の中核となる集団であると看做した。これに対して、喜田貞吉は、同祖すなわち同源という用語をキーワードとされていることから明白なように、日本民族と朝鮮民族は、現在ではまったく別系統に属する集団と位置づけられている。しかし古代においては、日本列島および朝鮮半島両地域の交流が頻繁に行なわれ、倭人が朝鮮半島にも居住しており、日鮮同域とでもいえる状況であった。すなわち、日本民族と朝鮮民族は元が同じであり、日本民族は一方的に朝鮮半島に居住する集団によって形成されたのではなかった。このように、鳥居龍藏および喜田貞吉のそれぞれの民族起源論には、その主体とする民族の起源地(発祥地)に関しても、見解が異なっている。

また、鳥居龍藏が主唱する「固有日本人」論では、朝鮮半島から日本列島に南下してきた時代を、有史以前の後半つまり弥生式土器を使用していた集団の時代を想定しているので、弥生時代であったことが推察される。これに対して、喜田貞吉が主張する日鮮同祖論では、日本民族は朝鮮民族と同様に、既に記したように、扶余系統

に近い天孫民族、銅鐸を残した秦人などの古漢族、弥生式土器を用いた出雲族、朝鮮半島の帯方郡より渡来した漢族などの異集団が、それぞれ濃淡が認められるものの、時代を違えて日本列島に來住した。そして、これらの集団が互いに接触・交流することで、日本民族が形成されたと説く。つまり、鳥居龍藏および喜田貞吉の両名では日本民族が成立した時期が異なっているのである。

さらに前述した如く、鳥居龍藏の「固有日本人」論では、日本民族の主体は北方地域から一方的に來住した集団であるとする。そのことと大いに関係していると推定されるが、かかる「固有日本人」が朝鮮半島や大陸に侵出したり、侵略するという、政策的な意味合いはまったくなかったとはいえないが、ほとんどなかった。これに対して、喜田貞吉の日鮮同祖論は、同祖とはいふものの日本民族が朝鮮民族を融合同化した側面もみられる。またそれ以上に、日鮮同祖論の発表は韓国併合後で、日本国民の気分が高揚していたことを割いても、当時の国家権力に仰合するような政策的な意味合いも大いに存在したのである。

以上論じたように、鳥居龍藏および喜田貞吉の日本民族起源論は、類似性あるいは相違性が共に各々数点あることが確認でき、種々の問題があることも明らかになった。とはいえ、例えば、既に紹介した岡正雄が唱える「日本文化の基礎構造」、あるいは江上波夫が提唱する「騎馬民族国家」論に代表されるように、その後の日本民族・文化に関して、先駆的な研究であったことは否定できない事実であ

る。

六、結語 結びに代えて

我々、日本民族、つまり日本人の祖先は誰であるか、という問題は、日本民族は勿論のこと、日本民族あるいは日本文化に関心を有する研究者を含む日本民族以外の人びとにとつても、非常に関心度が高いといえる。それ故、歴史学、考古学、人類学を先頭に、関連する学問諸分野で説明が試みられた。そしてその成果として、多くの論致が発表されたり、著書が出版されている。そのような学問的努力にもかかわらず、未だ説明するに到っていないというのが現状である。

本論を再度要約する余裕をもたないが、以下の点はとくに指摘しておきたい。

日本民族起源論前史に関しては、主として水野祐の著作（水野一九七〇、同一九七三）にみられる立場を継承した。その立場とは、事実関係の把握に関しては、出来る限り史（資）料を提示して説明、解釈を行なうことである。水野祐は著名な歴史学者（日本史学）であるので、このような立場から考察、研究するのは、むしろ当然のことといえる。したがって、その内容については、信憑性が著しく高いと推察できる。この水野祐の研究手法は、史（資）料を最重視する、いわゆる実証主義的歴史学の典型的な立場である。

一方、右述の水野祐の研究手法と異なる立場の代表として工藤雅

樹の研究（工藤一九七九、同一九九八）が挙げられる。工藤雅樹の研究も水野祐の研究に劣らず、史（資）料に基づいた非常に手がたいた研究史であり、信頼に足る内容となっている。水野祐の研究と異なるのは、著者である工藤雅樹の主張が随所に入れられている点である。この点に関しては、水野祐の著作ではほとんど確認できなかった点である。専門とする考古学を含む歴史学研究は勿論のこと、社会科学の研究手法としては当然といえる。

工藤雅樹は、日本民族の起源に関する研究をごく近年まで詳細にフォローしている。そこで、本稿の対象としている鳥居龍藏および喜田貞吉に関連する箇所についてのみ論じる。工藤雅樹は、鳥居龍藏および喜田貞吉の両名に共通した研究目的に大きな問題点が存在すると指摘する。その指摘とは、右述の水野祐の著書では確認できなかったが、当時の国家権力やそれと一体となった軍部の方針に仰合した形で研究・調査に従事していたのではないか、という疑念である。具体的には、国家（政府）の植民地政策や軍部を中心とした大陸侵略政策に積極的に加担したのではないか、という点である。かかる点をまず念頭に置いて、論が展開されているかのように推察できる。

具体的に指摘すると、鳥居龍藏が主唱する「固有日本人」論に関して、「以上のような点（古守島など北千島調査を指す―筆者註）に留意するならば、世界学術の檣舞台とは欧米の植民地支配に追隨して行なわれた植民地研究の意味あること及び、鳥居の研究は

いちじるしく朝鮮・中国・シベリアの侵略に仰合的である」(工藤一九九八・二〇四)と論じ、「日本帝国主義のアジア侵略と呼応して、アジアを舞台に応用・展開させ、記紀を合理的に解釈してその学問的裏づけにしようという」(工藤一九九八・一〇九)流れに沿った研究であると批判する。また、喜田貞吉が主張する日鮮同祖論に關しても、上田正昭は、喜田貞吉が「いまや皇威はいわゆる大八州の外に輝き近く朝鮮・台湾などもわが帝国の版図に加わりその民はわが臣民となった」(喜田一九三〇、上田一九七八・三二五)と論じていることをとらえ、次のような指摘を行なう。すなわち上田正昭は、「日本帝国の海外侵略を合理化する民族論である」と、工藤雅樹と同じ立場から厳しく批判するのである(上田一九七八・五二)。

以上のように、鳥居龍藏および喜田貞吉の両名が唱える日本民族に關する起源論は、共に植民地化を目ざす、日本帝国主義に加担する立場から執筆されたものであると批判される。

しかしながら鳥居龍藏に關しては、拙著(二〇〇七・V)において指摘した如く、確かに台湾調査(一八九六—一九〇〇年)において、東京帝国大学理科大学の教授らと共に、旧日本軍の御用船に便乗させてもらうなど、度々便宜を受けていたことは否定できない。この点について、「軍国主義の使命を果すためではなく」(鳥居一九五三、同一九七六C・二三五)と明確に述べている。それ故、そのことを国家権力に加担したとまでいい切れるであろうか。加担というのは、自らが国家権力の要請などにより、進んで現地に行き、

その要請に沿った成果を報告するなどの行為を指すのではあるまいか。さらに、その成果が軍など国家権力の行使に直接利用されていないことを考えれば、帝国主義のアジア侵略に呼応したとまでいい切れるだろうか。筆者は、そのような見解には否定的である。鳥居龍藏は軍に加担・協力する以上に、自らの学問的関心の解明のため、海外に出かけたのであった。その地域が偶然にも軍部が大陸に侵略した地域と一致しただけであると認識している。しかし、この点は、後々問題があることは充分承知しているので、今後さらに検討したく考えている。

このように、鳥居龍藏が主唱する「固有日本人」説、喜田貞吉が主張する日鮮同祖論は、それぞれの学問的態度が問われる学説なのである。

なお本稿は、鳥居龍藏および喜田貞吉の日本民族起源論に關する研究業績を、正当に再評価することを直接の動機として作成した。そのため、現在の学問的水準からすれば、訂正・補正する必要が認められる。さらに天孫民族、天孫種族に代表されるように用語の不統一も多くみられる。しかし、鳥居龍藏および喜田貞吉の日本民族論を主題とした関係から、右述した訂正・補正、および用語の統一などは一切行なわなかった。また、現在では、使用することが避けることが望まれる用語に關しても、訂正することなくそのまま使用した。

〔註〕

(1) 周知の如く、GHQにおいては、一九四七年頃から、ニューディール政策を支持する民政局(GS)と、反共を掲げる幕僚第二部(G2)との間の対立が激化した。その結果、前者のGS派は後退し、反共色の強い後者のG2派が前面に出て、優位に立った。

(2) 筆者は、歴史認識を、知り得た成果である知識を意味する歴史知識、史実に対する単なる見方である歴史感、および史実から得られた率直な思考である歴史観と異なる概念として把握し、使用している。この点に関しては、拙稿(田畑二〇一四・一四)でも論じたので参照のこと。また同様に、地理認識についても、地理知識、地理感、および地理観とは異なる概念として使用している(田畑二〇〇八・一三三、同二〇一四・九二、同二〇一七・三三)。

(3) 津田左右吉の主張する立場、いわゆる津田史学が代表的な立場である。津田左右吉は、普通選挙や政党政治にみられる民主主義的改革の要求が高まった大正デモクラシー時代に、『神代史の新しい研究』をはじめ、『古事記及日本書紀の研究』などの大作を続々と刊行した。これらの著作を通して、津田左右吉は、『記紀』の冒頭部に登場する神話伝説、つまり神話の部分(日本神話)が、史実を根拠とした客観的な記述でないことを強力に主唱した。そのため、皇室の尊厳を侵害した

と右翼から激しく攻撃されたことなどもあって、昭和十五年(一九四〇)に前二冊を含む主要著作が発禁処分となり、早稲田大学教授も辞任に追いやられた。

(4) 「日本文化の基礎構造」は、ほぼ同時に発表された関連論攷「日本民族文化の形成」(一九五六)と共に、岩波書店発行の岩波文庫にも復刻されている。それ故、岡正雄の学説はより広く一般の人びとも知られることになった。

(5) 岡正雄の学位請求論文がウィーン大学に提出されたのは、以下のような事情が存在した。岡正雄は、一九二五年東京帝國大学社会学科を卒業すると同時に、日本文化に多大の関心を有していた柳田国男らと協力して『民族』を発行した。同雑誌は、その後「柳田先生との諧調が壊れて」(岡一九九四・二二〇)廃刊となったが、その頃民具研究で著名な渋沢敬三の好意により欧州留学に恵まれ、ウィーン大学民族研究所に留学することになった。当時同民族研究所は、民族学研究におけるウィーン学派と称せられる程、民族学研究をリードする拠点の一つであった。そこで、Koppers, W. や Heine-Geldernらの指導を受けつつ、従来より関心を有していた日本民族文化の形成についての研究に従事した。その研究を整理し、纏めたのが右述の学位請求論文であった(大林一九九四・二六八―二七二)。同学位請求論文は刊行されなかったもので、提出当時その存在は、日本では一部の研究者を

除き知られていなかった。なお、第二次世界大戦後、東京大学教養学部にて文化人類学専攻を創設した石田英一郎も、岡正雄と同時期ウィーン大学民族研究所に留学している。

(6) 文化層という用語は、学位請求論文の論題の一部にも使用されている程、岡正雄の学説にとつてはキーワードの一つである。つまり、文化層とは、日本列島を取り囲む周辺諸地域から時代を違えて数度にわたり伝播した文化の波のことを意味している。なお岡正雄には、文化はその文化の担い手集団と共に移動するという、文化移動説の立場を踏襲する。それ故、文化を担っている集団も、日本列島に伝来したことになる。文化移動説は、Smith, Elliot, G.を中心に唱えられた、文化人類学におけるマンチェスター学派と目される文化移動説とは若干異なる立場である。Smith, Elliot, G.の文化移動説は、エジプトのミイラを調査した経験などから、文化の発祥地はエジプトであると断定する(堀一九五四:二〇三—二〇五)。そしてエジプト文化が世界各地に伝播したと主張し、文化発祥地一元説の立場を取る。この学説は、わが国においても西村真次が唱え、第二次世界大戦以前多くの著作(西村一九二九など)を著し、一定の支持者を得た。岡正雄は、文化はその文化の担い手集団と共に伝播すなわち移動するとするが、文化発祥一元説を取らない。

(7) 座談会は昭和二十三年(一九四八)五月、東京御茶の水の喫

茶店で開かれた。出席者は司会を務めた石田英一郎他、岡正雄(民族学)、江上波夫(東洋史)、八幡一郎(考古学)の四名であった。この座談会の内容は、翌昭和二十四年四月に第二次世界大戦後復刊された『民族学研究』一三—一三に掲載された。なお、その内容が研究者間で大きな反響を浴びたことから、単行本(岡一九五八)として出版された。

(8) 「騎馬民族国家」論は、岡正雄が唱える「日本文化の基礎構造」(第一表)の中で、北方から南下し、朝鮮半島経由でもっとも遅れて伝来した、天皇一族を中核とした集団が、日本列島に王朝(征服王朝)を形成したと主張する民族国家論である。

(9) 「照葉樹林文化」論は、岡正雄の「日本文化の基礎構造」(第一表)にみられる、南方から渡来した第二及び第四の波(段階、文化層)に関連する集団により、形成されたとする民族文化論である。

(10) これまで幾度となく使用してきた、本稿のキーワードの一つである日本民族を、歴史学を主専攻とする水野祐の概念規定と同様な意味で使用する。すなわち水野祐は、「民族 ethnic group」という語は、人種が形質的特徴に基づく自然科学的概念であるのに対して、全く対照的に文化的特徴に基づいて人群を識別する場合に使用される。…(中略)…文化すなわち人間の生活様態 *Life mode* の共有…(中略)…日常生活において文化複合体としての日本文化を共有する人群の称であ

る」(水野一九七〇…二〇五)と規定している。なお、水野祐には、この日本民族、および後述する日本人、日本民族形成など、日本民族起源論についての主要な用語において、他の著作(水野一九七三、初版一九六〇)でもほぼ同内容の記述を行なっている。

(11) 水野祐によれば、日本人はほとんど無意識、広範に使用されている用語であるとして、次のように概念規定している。それは、「すなわち日本国内—日本列島を日常生活の本拠として生活を営み、かつ日本人の自覚を有している住民 Population, inhabitants をさして日本人と称している。日本列島の固有の民族こそ、日本人である」(水野一九七〇…二〇五)とする。その上で、この日本人は漠然としてではあるが、体格、容貌、言語、習俗など基本的な要素を共有するという特徴を兼ね備えていると指摘する(水野一九七〇…二〇五—二〇六)。

(12) 石器時代と称しても、厳格にいえば新石器時代である。相沢忠世によって旧石器時代の地層である関東ローム層から石器が発見されたのは、第二次世界大戦後の一九四九年のことであった(相沢一九六七、芹沢一九八二…二一—二二)。また一九七〇年には、沖縄本島南部の具志頭村港川において、ほぼ全身の状態で数万年前の四体の人骨が発見された。この人骨は、発見された地名に因んで港川人と呼ばれている(埴原一九九六…一一六—一一七)。しかし、いずれもその発見が第

二次世界大戦後であることから、本稿で展開している、古代から続いている日本民族起源論争では対象外であった。なお、港川人は縄文人の祖先集団と考えられている。しかし、日本列島南端に近い沖縄本島で発見されたことなどから、日本人全体の祖先と看做してよいかという点に関して、問題があるとされている(埴原一九九六…二二一)。

(13) その後同様に、雷神が使用したであろうと推察する「石器天工」説がみられた。これら「石器天降」説や「石器天工」説は、我々日本民族の祖先に当たる集団のものではなく、日本列島の「先住民民族非日本人」説の一つと看做されている(水野一九七〇…二二六、清野一九九四)。

(14) この点に関して、寺田和夫は、日本考古学者が独自の見解によって、石器が人工物であることを欧州の研究者とほぼ同時に看破したとする、著名な自然人類学研究者清野謙次の言説を引いて、新井白石の先駆的見解を高く評価している(寺田一九八五…九)。

(15) 工藤雅樹によると、von Stebold, P. E. 以前に、布教や鎖国後の貿易のために来日した外国人の中にも、日本民族の起源(日本人種起源論)に強い関心や興味をもつ者も存在した(工藤一九七九…三六—三八)。その中でも、オランダの日本商館長付きの医師として来日したドイツ人 Kämpfer, E. は、旧約聖書に書かれている如く、バビロンを本源とし、そこから東

方に向かった集団の一行が、アムール川（黒龍江）を下り、日本海に沿って南下し、朝鮮半島経由で渡来し、日本民族の祖先つまり起源となったと推定した。すなわち Kompler は、日本民族の祖先バビロニア起源説を展開した（工藤一九七九：四二―四三）。

- (16) 工藤雅樹は、von Siebold, P. E. は、Kompler, E. なども唱える、日本人韃靼民族系説を言語・風俗などを比較することで主張した。また、日本民族の起源を「朝鮮および北海道・樺太のアイヌに求め得る可能性を指摘している」（工藤一九七九：四八）ことに關しても、大いに注目すべき見解であるという。このような von Siebold, P. E. の見解は、「その方法として體質・言語・風俗・宗教などの類似をもとにするという点からも、一方では後の「日鮮同祖論」的な説の、他方では人類学者による汎アイヌ説の先駆」（水野・四八）といえる、と鋭く指摘している。

- (17) Morse, E. S. は、当初からお雇い外国人として東京帝国大学に招聘されたものではなかった。日本近海に生息する、シャミセンガイに代表される腕足類の調査・研究のために、明治十年（一八七七）に横浜に到着した。当時東京帝国大学では動物学を担当する教授を探していたので、その適任者として採用されることになった。Morse, E. S. は、東京帝国大学動物学を講義すると同時に、腕足類の研究を進める過程で、

Darwin, C. の「進化論」の影響を受けていた。そのため、「進化論」の紹介・普及にも努めた（工藤一九七九：五一、寺田一九八一：一四―一五）。

- (18) Milne, J. はイギリスの鉱山技師であり、地震学を専門としていた。明治九年（一八七六）に来日したが、その後約十九年間の長期に渡り滞在し、工部大学校、東京帝国大学で鉱山学・地震学を担当した。とくに日本地震学会などを創設するなど、わが国の地震学の発展に大きく貢献した（工藤一九七九：七〇）。そのため、日本地震学の父と称されることになった。なお、Milne, J. に關しては、吉岡郁夫による詳細な解説が存在する（吉岡・長谷部一九三三：一一―一三三）。また、主要論攷五編についても日本語訳がある（吉岡・長谷部一九九三：一三六―一五二）。

- (19) 他に、アイヌ語では koropok-un-guru と呼ばれ、koro は 露、puk は 下、un は物を示す語、guru は人を意味する合成語であるとし、「露の下に居る人」という説もある（水野一九七三：二九、鳥居一九五三、同一九七六C：二二）。

- (20) 英国教会伝道会（後の日本聖公会）の宣教師として、明治十年（一八七七）以来函館に住み、昭和十五年（一九四〇）太平洋戦争勃発のため日本を去るまで、長期間活動を続けた。アイヌ語と日本語との音節構造上の類似性や、地名からアイヌ語が日本語の祖先であることなどの研究に従事した。

(21) 池田次郎は、日本民族すなわち日本石器時代人の科学的究明は、Morse E. S. による大森貝塚の発見からであると指摘している（池田・大野編一九九三・五）。

(22) 坪井正五郎は文久三年（一八六三）に生まれ、東京帝国大学理科大学生物学科に入学した。生物学科卒業後、直ちに同大学院に入学し、開設されたばかりの人類学を研究することになった。大学院修了後イギリスに留学に行き、帰国すると理科大学教授となり、人類学教室主任となった。イギリス留学には、「人類学為修学満三年英国留学ヲ命ス」という辞令ももらった。このように、坪井正五郎は、新進気鋭の研究者として大いに期待されたのである。しかし、大正二年（一九一七）ロシアのレニングラード（サンクトペテルブルグ）で開催された万国学士院連合大会に出席したが、大会終了後現地にて客死した（寺田一九八三・三八―四六など）。

(23) 本来であれば、坪井正五郎が主張するコロボ（ポ）ツクル説およびその説に反論した白井光太郎や小金井良精が展開するアイヌ説は、アイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争と称される程、日本民族起源論を主題として、多くの人がとに関心もたれた。それ故、日本民族起源論を主題としている本稿においても、詳細かつ具体的な検討・分析が是非とも必要である。しかしながら本稿では、日本民族起源論を展開した研究者の中から、鳥居龍藏および喜田貞吉に限定して、論を展開している。そ

のため、アイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争は、本稿に直接関係する場合のみ、検討などを行なう。

なお、アイヌ＝コロボ（ポ）ツクル論争に関しては、水野祐（一九七〇・三一―三三）、池田・大野編（一九七三・五四―二六）、寺田和夫（一九七五、同一九八六・五三―六六）、工藤雅樹（一九七九・四九―一三五、同一九九九・一四―三七）の著作を筆頭に非常に多くの文献が存在する。また筆者も、拙著（田畑二〇〇七・六九―七五、二〇七―二二〇）において論じた。

(24) 占守島調査は、坪井正五郎に対して持ち込まれた依頼であった。依頼主は、陸軍大尉郡司成忠であった。郡司成忠は、占守島において開拓・移住計画を立てていた。そのための下見検分を明治三十二年（一八九九）に実施した。その占守島で竪穴式住居跡を発見した。竪穴式住居はアイヌが居住するには余りにも小規模であった。そこで、この竪穴式住居跡は、坪井正五郎が主唱するコロボ（ポ）ツクルが作成したのではないかと疑い、坪井正五郎に調査してほしいと依頼したのであった（田畑二〇〇七・三三―三六）。なお占守島に関しては、郡司成忠に引率された報効義会隊員が滞在して開拓に当たった。しかし、この開拓事業は失敗し、報効義会隊員一名が残るのみとなった。その隊員の遺児が第二次世界大戦終了時まで住み続けた。占守島に関しては、その遺児による著作（別

所一九七七)に詳しい。

- (25) このように、鳥居龍藏は、とくに占守島をはじめ千島列島に行き、調査を実施したいという強い意識をもっていなかった。ただし鳥居龍藏は、占守島に出发する以前にアイヌに関する論攷を一編(鳥居一九九五)発表している。同論攷は日本民族起源論に直接関連がないが、日本民族の中核と看做される大和民族以外の論攷としては、最初のものである。周知のように、明治八年(一八七五)に樺太・千島交換条約が成立し、千島列島の内、得撫島以北の島々が日本領と規定された。なお、鳥居龍藏による古守島を含む、千島列島調査については、拙攷(田畑一九九八、同二〇〇七・一七九―二三三)でも論じたことがあるので参照のこと。

- (26) 鳥居龍藏は、その著書(鳥居一九〇三、同一九七六b、一二)において、アイヌを分布・居住している地域に従って、三種類のアイヌに区分している。すなわち、北海道全域および千島列島南部の国後島、択捉島に居住する蝦夷アイヌ、樺太に分布する樺太アイヌ、千島列島最北端占守島から、ラワサ(ラショワ、羅処和)島に住む、北千島アイヌである。

- (27) 東京帝国大学医科大学教授で、解剖学を専門とし、日本人の骨の研究で著名であった。日本民族すなわち日本人の祖先を明らかにするため、坪井正五郎と共に明治二十一年(二八八八)北海道調査に出かけた。その結果、坪井正五郎、

小金井良精の両名は、それぞれの説を正しいと確認することになり、結着が付かなかつた。さらに、小金井良精は、単独で北海道調査を行なった。小金井良精は、これら北海道調査の成果を踏まえ、かつ日本人骨の研究などから日本民族アイヌ起源論を正式に発表した(小金井一九九〇)。

- (28) 人種という概念は、蒙古人種やイヌイトが代表なのであるが、ひとつの人種(単一人種)がひとつの民族(単一民族)を形成しているという考え方に通じる。高山龍三によれば、このような考え方はむしろ例外に存するもので、人種は統計的概念に過ぎない(高山一九九二・六〇)。日本民族の場合も同様で、岡正雄の「日本文化の基礎構造」にみられる種族文化複合に代表されるように、ひとつの人種より形成されたとは考えにくい。それ故、人種という概念より民族という概念の方がより実態に近い概念ではないか、と推察される。しかしながら、この点について、人種あるいは民族という概念自体を学術用語として使用することは問題があり、幻想に近い概念であるという見解もみられる(スチアート・ヘンリー編二〇〇〇など)。
- (29) 工藤雅樹によれば、鳥居龍藏の占守島調査などの成果は、小金井良精が自説であるアイヌ説に有利な証拠と判断したために、一般の人びとの間ではアイヌ説が普及したとする(工藤一九七九・一〇八)。

(30) 鳥居龍藏によれば、民族の歴史を研究する学問分野、例えば人類学、人種学、文化史学などにおいては、以下のように三時代に区分するのが一般的であるという（鳥居一九一七、同一九七五・一七四―一七七）。三区分とは、古い方から順に有史以前（Prehistoric）、原史時代（Protohistoric）、および歴史時代（Historic）である。その内、有史以前の特徴は、門碑伝説なき時代で、石器時代が該当する。この時代を形成した主要集団は、アイヌと「固有日本人」である（田畑二〇一七・一五―一六）。

(31) 鳥居龍藏は、アイヌが南方から島々を経由して日本列島に來住したとする南方説もみられるという（鳥居一九一一、同一九七五・一五〇四）。なお、同様の論旨は、その後に出版された著書（鳥居一九二五b、同一九七五・三八七）にもみられる。

(32) 古代史の用語としては、『日本書紀』や『古事記』いわゆる『紀記』に記載されている国津神、つまり国津神系の土着集団がほぼ該当する。この集団は、古く天孫降臨前から日本列島に來住した集団であるという（鳥居一九二五b、同一九七五・三八六）。なお、天孫降臨した集団を国津神に対して、天津神あるいは天津神系の集団であるという。

(33) インドネシアは、一般にマレー人種あるいはマレー民族と称される民族集団で、著名な人類学者 Beets & Hoijer の分類では世界三大人種（コーサソイド、モンゴロイド、ネグロイド）

の内、インドシナ民族と共にモンゴロイドの分派（亜）集団として位置づけられている（高山一九九二・六三三）。鳥居龍藏によれば、マレー人種は固有マレーとインドネシア人に大きく二分できるといふ。前者のマレー人種は、文化程度が高く、イスラム教を信仰し、アラビア文字を使用することを特徴としている。また頗るインド文化の影響を受けている。シンガポール、ジャワ島などに分布している。一方、後者のインドネシア人は、極めて原始的なマレー人種で、文化程度が低い。また衣服も、男性は腰に裋、女性は腰巻を纏っており、足は跣足というように大変簡素である。さらにこの集団には、首狩りの習慣が残っていることも特徴の一つといえる。主要分布は、スマトラ、ボルネオ、フィリピン、台湾など島嶼部が中心である（鳥居一九二五b、同一九七五・三八八）。この集団の中でも、日本列島に近いフィリピン、台湾に住む集団の血が「固有日本人」にも混じっているという。

(34) 南シナに分布・居住する先住民で、漢族がこの地に來住する以前までは、南シナ海のほぼ全域の広範囲な地域に分布していた。銅鐸に類似しているとされる銅鼓を伝統的に所有することが特徴とされる。ミャオ（苗）族がこの集団の代表とされる（鳥居一九二五b、同一九七五・三八一―三八二など）。なお現在では、鳥居龍藏の指摘と異なり、ミャオ族は銅鼓を所有していない。管見では、銅鼓を所有しているのは、ミャ

オ族の近くに居住する、ヤオ(瑤)族の分派(亜)集団である白禰ヤオ族、スイ(水)族などである。前述のインドネジアンおよびインドシナ民族に関しては拙著(田畑二〇〇七:七六一―七八)においてやや詳細に論じたことがあるので、参照のこと。

(35) とくに、「固有日本人」とインドネジアンとの混血は雑種型を形成し、固有種を形成するまでに達していた。古代史に登場する隼人は、その典型であり、頗るインドネシアンの風俗と類似していると指摘する(鳥居一九二五b、同一九七五:三八六)。

(36) 筆者には、喜田貞吉の日本民族論に関して検討・分析を加えた論攷(田畑二〇一一b)を發表している。同論攷は、一部に本稿の主題である日鮮同祖論も含まれているが、論旨は鳥居龍藏との比較ではなく、喜田貞吉の日本民族論のとらえ方を中心に展開した内容となっている。しかし、同論攷には本稿と重複する内容もみられるが、ほぼ同様の主題を研究対象としている関係上、避けられなかったためである。なお、喜田貞吉については詳細な自伝(山田一九七六)が存在する。

(37) 喜田貞吉は、東京帝国大学文科大学卒業後、同大学院において当初日本の歴史地理学を研究した。歴史地理学に関する論攷(喜田一九〇〇)も存在する。なお喜田貞吉は、明治三十三年(一八九九)に学友および先輩たちと共同で、日本

歴史地理研究会(後に日本歴史地理学会と改称。現在の歴史地理学会とは別の組織)を設立し、機関誌『歴史地理』を發行した。

(38) 筆者は、歴史地理学も専門分野の一つとしている。その関係から、喜田貞吉にも多大の学問的興味・関心を有し、学問的業績を再評価する作業を進めてきた。再評価の作業を行なっているのは、上田正昭が、「その内容は必ずしも体系的ではなかったから「雑学的」などと評される部分も内包している」(上田一九七八:一五)と指摘していることと深く関連している。すなわち、第一点として、喜田貞吉の研究対象は多岐にわたっていること。第二点として、研究は専門とする歴史学は勿論のこと、歴史学、地理学、民族学、社会学など関連諸学問分野の研究手法を用いて行なっている。そのため、著名な研究者にもかかわらず、学問的業績について正面から論じられることが少ないことなどが挙げられる。この点を克服する目的で、喜田貞吉が論争の当事者であった法隆寺論争(田畑一九九九:二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇三)、南北朝正閏問題(二〇一一a)、および上述した民族論(二〇一一b)などの論攷を發表してきた。

(39) 喜田貞吉は、還暦記念に出版した回顧録の中で、一三〇〇編余りの論攷を發表したと記している(喜田一九三三、同一九八二:二三四)。

(40) 喜田貞吉は、日鮮同祖論以外に多くのテーマの下で民族史研究を行なっている。その代表的な研究としては、土蜘蛛に関する研究（喜田一九一〇、同一九七九・七九一九九）、倭人考（喜田一九一六b、同一九七九・一五九一―一六三）、秦人考（喜田一九一七、同一九七九・三二五―三四四）などが挙げられる。

(41) これらの諸民族集団は、互いに通婚することを怠まなかった。しかし、この集団は国津人の後裔であるだけでなく、秦、漢、百濟などの海外の諸蕃の裔を受けており、日本においては皇紀、夫人の列に加わった者も多くみられる（喜田一九一九b、上田一九七八・二〇九）。かような理由から、これらの諸民族集団は、日本民族を形成する集団に加わることができたのである。

(42) 日鮮同祖論を検討するには、喜田貞吉が当時置かれていた立場、またそれと大いに関連すると推察できる社会情勢も検討しなければならない。この点に関しては拙論（田畑二〇〇七・五）において検討しているので、本稿では省略した。

(43) 本稿の性質上、同論攷を度々参考あるいは引用する。本来であれば、これら参考あるいは引用した場合、該当する箇所を明示することが必要である。しかしながら、そのように行なえば、本文自体が煩雑になり、論旨の把握が困難となる恐れが充分存在する。そこで、同論攷からの参考および引用のみに関しては、該当する箇所のページ数を明示することを割愛

した。ただし、直接引用の箇所については、その箇所が明確に判明可能とするために鈎括弧で示した。

(44) 喜田貞吉には、日鮮同祖論に直接関連する著作として、「日本民族とは何ぞや―日本民族の概念を論ずる」（喜田一九一九a）、「朝鮮民族とは何ぞや（日鮮両民族の関係を論ず）」（喜田一九一九b）、「日鮮両民族同源論梗概」（喜田一九二二）の三論攷がある。

(45) 朝鮮の季朝末期に使用された名称。一八九七年より一九〇一年間、日本による併合までの国名。大韓帝国の略称である。

(46) 考古学上の知見とは以下のことを指す。石器時代の遺物、遺跡から知られる民族は、大きく二系統（流派）を構成していた。これら二大系統の集団は共に国津神と称されていた。またアイヌは国津神とは別系統であるが日本列島に先住していた。それ故、当初は既に述べた如く、日本民族から除外されていた。そのアイヌは、中部地方において、朝鮮半島から渡来した弥生式土器を使用する集団（弥生式民族）によって包容された。そのため、東国以北の地において、継承・発展した。それが、後の歴史時代に蝦夷として知られている集団である。一方、中部地方の弥生式民族は、天孫民族と同化融合して日本民族を形成し、その後東国以北にいた蝦夷は、弥生式民族と同様に、日本民族の中に融合された。

(47) 蕃とは、一般に文化が遅れた異集団を指す。喜田貞吉は、諸

蕃の例として、秦人、漢人などの民族を挙げている。

- (48) それ故、古代において朝鮮半島に押しつまった集団は、さらに海（日本海）を渡って日本列島に到着した。したがって、日本民族を構成する要素の中には朝鮮半島に存在するものもみられる。そのため、日本、朝鮮の両民族の構成要素は大体において、類似性が高く大差がないといえる。

- (49) 朝鮮民族を構成する韓族とは、以下の集団であった。すなわち、韓族の祖先は、朝鮮半島で倭人と推定されている集団、つまり日本の土着民と同一系統のものを指す。この集団は、石器時代において出雲民族と同じく、弥生式土器を使用していた。そのため、現在の朝鮮民族の中には、日本民族同様、かかる集団の後裔が混合していることは疑うことができない。その後この集団の中に、南下してやってきたのが扶余族（種）であった。濊、貊、挹婁、沃沮などと呼ばれている集団は、扶余族と親族関係であった。

なお、漢籍に記載されている倭人には、「前後の両期において、前期のものは主として九州地方の住民を指し、後期に到りて同一名称をわが国に及ばせるもの」（喜田一九一九b、同 一九七九・一六二）の二系統の集団が存在するという。

- (50) 日本民族の場合、先住土着民の中にアイヌ系統の集団の遺跡が認められることなどから判断すると、歴史時代においてもアイヌとの混血がかなり著しかったと推定できる。それ故、

アイヌ系統の集団も、その後の日本民族組織の要素になったのである。

- (51) 工藤雅樹と同様に、日本人の祖先を日本人種という立場で研究している代表者として、形質（自然）人類学を専門とする清野謙次（清野一九三五）が挙げられる。

- (52) 第二次世界大戦前、とりわけその直前から戦中にかけて、唯一の歴史認識とでも称すべき皇国史観は、万世一系という用語で代表されるように、日本列島に居住した住民を一つの系統と看做す、日本人種論の立場であるといえる。

- (53) 「固有日本人」論では、北方地域から来住した集団の他、インドネシアン、インドシナ民族と称される南方起源系の集団も、日本列島に来住したとする。しかし、これらの南方系の集団は、日本民族を形成する集団の主体とならなかった。また、日鮮同祖論においては、漢籍にみられる秦人など北方系以外の集団も日本民族構成メンバーに入っているが、秦人同様、主体とはならなかった。

- (54) 水野祐は日本起源論に関して詳細な研究を行なっていることは大いに評価したい。しかし朝鮮に関しては、若干の記述（水野一九九三・二六九など）がみられるが、日鮮同祖論についてはまったく記述がない。あたかも水野祐は、日鮮同祖に関心をもたないか、日本同祖という用語自体に対して嫌悪を抱いているかのように感じられる。この点は、水野祐の著作名

が『日本民族文化史』、『新訂増補 日本民族の源流』と付けられていることなどから、日本に限定して朝鮮に関する議論を除外したのではないかと推察する。つまり、水野祐の歴史学（日本史学）に対する立場とも関係しているのではないかと思われる。なお、工藤雅樹の日本民族起源（水野祐のいう日本人種論）を主題としている著書（工藤一九七九、同一九九八）では、引用あるいは参考文献として水野祐の著作は勿論のこと、名前すらも登場しない。

(55) その他に、上田正明（上田一九七八）の研究なども挙げることもができる。このような立場を主張する研究者は、歴史学を専門に研究している中で、どちらといえば進歩的な立場取るか、あるいは肯定する研究者に多いという傾向がみられる。

(56) 筆者がこのような見解をもつようになったのは、鳥居龍藏の晩年の経歴からの影響も少なくない。（鳥居一九七七・二一八―二二二）。すなわち、鳥居龍藏は、日中戦争中の昭和十四年（一九三九）捕虜ではなく北京の燕京大学（現北京大学）から招聘されて、客座（客員）教授に就任した。その後戦争悪化により同大学は閉鎖されたが、そのまま中国に滞在し、研究に没頭した。終戦後も再開された同大学に客座教授として残り、昭和二十六年（一九五二）帰国した。

「引用文献」

相沢忠洋（一九六七）『岩宿の発見』講談社、同書は一九八〇年講談社文庫の一冊として復刊された。

岡正雄（一九五八）『日本文化の基礎構造』大間知篤三・関敬吾・

岡正雄編『日本民俗大系』第二卷 平凡社一八一―三三六所収。

石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎（一九五八）『日本民族

の起源―対談と討論―』平凡社、なお同書は、一部省略されて

江上波夫編（一九九五）『日本民族の源流』講談社（講談社学術文庫）として出版されている。

伊藤信夫（一九八二）『解説』喜田貞吉（一九八二）『喜田貞吉

著作集 第十四卷六十年の回顧・日誌』平凡社 六一―五

六二―所収。

池田次郎・大野晋編『論集 日本文化の起源 第五卷日本人種・

言語学』平凡社。

上田正昭（一九七八）『日本民俗文化大系（五）喜田貞吉 歴史と

民族』講談社。

上山春平編（一九六九）『照葉樹林文化―日本文化の深層―』中央

公論社（中公新書）。

江上波夫（一九六七）『騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ』

中央公論社（中公新書）。なお同書は、昭和五十九年（一九八四）

に中央公論社より中公文庫の一冊として復刻されている。

M・S（二八八七）『札幌近傍ピット其他古跡ノ事』『東京人類学会

報告』創刊号八一〇。

大林太良（一九九四）：『解説』、大林太郎編：『岡正雄論文集 異人

その他一二篇』岩波書店（岩波文庫）、岡正雄（一九七九）：『異

人その他 日本民族Ⅱ文化の源流と日本国家の形成』言叢社

二六七—二七七所収。

岡正雄（一九五六）：『日本民族文化の形成』改訂新版『図説日本文

化史大系』第一巻 小学館三一—七所収。

岡正雄（一九七九）：『異人その他 日本民族Ⅱ文化の源流と日本国

家の形成』言叢社 なお同書は一九九四年に岩波書店から岩

波文庫の一冊として復刊されている。

喜田貞吉（一九一〇）：『土蜘蛛種族論に就て（小林君の駁論に答う）』

『歴史地理』一〇—一二、喜田貞吉著作集 第八卷民族史の

研究』平凡社、七九—九九所収。

喜田貞吉（一九一六b）：『倭人考諸論』『歴史地理』二八一—喜

田貞吉（一九七九）：『喜田貞吉著作集 第八卷民族史の研究』

平凡社 一五九—一六三所収。

喜田貞吉（一九一七）：『秦人考諸論（秦人考の一）』『歴史地理』

三〇—二六、喜田貞吉（一九七九）：『喜田貞吉著作集 第八卷

民族史の研究』平凡社、三二五—三四四所収。

喜田貞吉（一九一九a）：『日本民族とは何ぞや—日本民族の概念を

論ず—』『民族と歴史』一一一、上田正昭（一九七八）：『日本

民族文化大系（五） 喜田貞吉 歴史と民族』講談社、二〇二

—二二〇所収。

喜田貞吉（一九一九b）：『朝鮮民族とは何ぞや（日鮮両民族の関

係を論ず）』『民族と歴史』一一六、喜田貞吉（一九七九）：『

喜田貞吉著作集 第八卷民族史の研究』平凡社、三四五—

三五六所収。

喜田貞吉（一九二二）：『日鮮両民族同源論梗概』『同源』三、一五一

四〇。

喜田貞吉（一九三〇）：『日本民族史概説』『日本風俗史講座』五、

上田正昭（一九七八）：『日本民族文化体系（五） 喜田貞吉

講談社一七九—二二二所収。

清野謙次（一九四四a）：『日本石器時代人種論に関する三種の学説』、

清野謙次『日本人種変遷史』小山書店、池田次郎・大野晋編

（一九七三）：『論集 日本文化の起源 第五巻 日本人種論・

言語篇』平凡社、三三一—三五一所収。

清野謙次（一九四四b）『日本人種変遷史』小山書店。

工藤雅樹（一九七九）：『研究史 日本人種論』吉川弘文館。

工藤雅樹（一九九八）：『東北考古学・古代史学史』吉川弘文館。

小金井良精（一九八〇）：『本邦貝塚ヨリ出ルル人骨ニ就テ』『東京人

類学会雑誌』六十五、四一—四六。

小金井良精（一九〇三）：『日本石器時代の住民』『東洋学芸雑誌』

二五九、一五一—一六七、同二六三、九〇—一〇七。

小金井良精（一九〇五）：『日本石器時代の住民』春陽堂。

佐々木高明（一九八二）：『照葉樹林文化の道―ブータン・雲南から

日本へ―』日本放送出版協会（NHK ブックス）。

スチュアート・ヘンリ編（二〇〇二）：『民族幻想論―あいまいな民族つくられた人種―』解放出版社。

芹沢長介（一九八二）：『日本旧石器時代』岩波書店（岩波新書）。

高山龍三（一九二二）：『環境・人間・文化』八千代出版。

田畑久夫（一九九八）：『鳥居龍藏と北千島―調査記録よりの分析―』

『昭和女子大学文化史研究』創刊号、田畑久夫（二〇〇七）：『鳥居龍藏のみた日本―日本民族・文化の源流を求めて―』古今書院 一七九―二二二所収。

田畑久夫（二〇〇三）：『照葉樹林文化の成立と現在』古今書院。

田畑久夫（二〇〇八）：『リュシアン・フェーヴル (Febvre, L.) の

地理認識―『大地と人類の進化―歴史への地理学的序論』を中心に―』『日本文化史研究』三九 一三五―一五五。

田畑久夫（二〇一〇）：『喜田貞吉と奈良―南北朝正閏問題を例として―』『奈良学研究』一三、五九―七四。

田畑久夫（二〇一〇）：『喜田貞吉の民族論―日鮮両民族同源論を中心として―』『民俗と歴史』二九 一一―一四。

田畑久夫（二〇一〇）：『ウィットフォードの地理認識（上）―『地理学批判』を中心に―』『昭和女子大学文化史研究』一四

九四（一）―七七（一八）。

田畑久夫（二〇一四）：『鳥居龍藏の歴史認識―『有史以前の日

本』改訂新版を通して―』『昭和女子大学文化史研究』一七

一五〇（一）―一三（三八）。

田畑久夫（二〇一七）：『中島健一の地理認識―水力社会論を中心に―』『昭和女子大学大学院生活機構学研究紀要』二六、一

―二二。

田畑久夫（二〇一七）：『鳥居龍藏の古代研究―人類学上より見たる上代の文化（I）の分析を通して―』『昭和女子大学文化史研究』二〇 四―二八。

田畑久夫（一九九九）：『二〇〇一・二〇〇三』：『喜田貞吉と

法隆寺―法隆寺論争を中心に―（上）・（中）・（中二）・（下）』『奈良学研究』二、五九―八三、同三、七七―九〇、同四、三三

―五〇、同六、四五―六四。

坪井正五郎（一八八三）：『コロポックル北海道に住みなるべし』『東

京人類学会報告』二―二二、九三―九七。

坪井正五郎（一九〇三）：『日本石器時代の人民論』『東洋学芸雑誌』

二六、一、一五七―一六三。同二六三、九〇―一〇七。

幸田和夫（一九七五）：『日本の人類学』思索社。同書は、一九八〇

年に角川書店より角川文庫の一冊として復刻された。本稿では同書を使用した。

鳥居龍藏（一八九九）：『アイヌの木偶と云へる物』『東京人類学雑誌』

一〇九、鳥居龍藏（一九七六）：『鳥居龍藏全集 第一二巻』朝日新聞社、四四―一四四三所収。

鳥居龍藏(一九〇三):『北千鳥アイヌ』吉川弘文館、鳥居龍藏(一九七六b)『鳥居龍藏全集 第七卷』朝日新聞社一九八〇所収。

鳥居龍藏(一九二一):『古代の日本民族移動発展の経路』『歴史地理』二八―五。鳥居龍藏(一九七五) 鳥居龍藏全集 第一卷』朝日新聞社 五〇四―五〇八所収。

鳥居龍藏(一九二七):『閉却されたる大和国』『人類学雑誌』三二―一九、

鳥居龍藏(一九七五)『鳥居龍藏全集 第一卷』朝日新聞社 一七三―一八四所収。

Tori Ryuzō (一九一九): 'Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Les Ainou de Iles Kouriles' 『東京帝国大学理科大学紀要』

四二―一、鳥居龍藏(一九七六a)『鳥居龍藏全集 第五卷』朝日新聞社 三二―一五五所収。

鳥居龍藏(一九二五a):『有史以前の日本』磯部甲陽堂、鳥居龍藏(一九七五)『鳥居龍藏全集 第一卷』朝日新聞社 一六七―四五三所収。

鳥居龍藏(一九二五b):『人類学上より見たる我が上代の文化(一)』叢文閣、鳥居龍藏(一九七五):『鳥居龍藏全集 第一卷』朝日新聞社 一三―一六〇所収。

鳥居龍藏(一九五三):『ある老学徒の手記 考古学とともに六十年』朝日新聞社、鳥居龍藏(一九七六c):『鳥居龍藏全集 第一二卷』朝日新聞社、一三七―一三四二所収。

鳥居龍藏(一九七七):『著述総目録・年譜』、鳥居龍藏(一九七七):『鳥居龍藏全集 別巻』朝日新聞社 一七九―二二二所収。

西村真次(一九二九):『文化移動論』エルノス
埴原和郎(一九九六):『日本人の誕生 人類はるかなる旅』吉川弘文館(歴史文化ライブラリー)。
別所二郎藏(一九七七):『わが北千鳥記 占守島に生きた一庶民の記録』講談社。

堀喜望(一九五四):『文化人類学―人間と文化の理論』法律文化社。
水野祐(一九七〇):『日本民族文化史』雄山閣。
水野祐(一九七三):『新訂増補 日本民族の源流』雄山閣。なお初版は昭和三十五年(一九六〇)に出版されている。

Milne, J. (一九八二): 'Notes on the koro-pok-guru or Pit-Dwellers of Yezo land, kurile Islands, Transactions of Asiatic Society of Japan, Vol. 10, pp.187-198. 吉岡郁夫・長谷部学(一九九三):『ミルンの日本人種論 アイヌとコロポックル』雄山閣。

Morse, E. S. (一九七九a): 'Shell Mounds of Omori, Memors of Science Department, University of Tokyo, Japan. Vol. 1. Part 1. 近藤義郎・佐原真編訳(一九八三)『大森貝塚付関連史料』岩波書店(岩波文庫)。

Morse, E. S. (一九七九b): 'Trances of An Early Race in Japan, The Populor Science Mounthly, 14. 池田次郎訳(一九七三):

「日本における古代人種の痕跡」 池田次郎・大野晋編『論集

日本文化の起源 第五卷 日本人種論・言語学』平凡社

五四―六〇所収。

山田野理夫（一九七六）…『歴史家 喜田貞吉』宝文館出版。

吉岡郁夫・長谷部学（一九九三）『ミルンの日本人種論 アイヌと

コロボツクル』雄山閣。

渡瀬荘三郎（一八八六）…『札幌近傍ピット其他古跡ノ事』『人類学

会報告』創刊号 八一―一〇。